

アカーシャの舷窓

第二話 「アカーシャの舷窓」

第二項

ロボットは、ヒトに与えられた命令に服従しなければならない。
尤も、与えられた命令が前項に反する場合は、この限りではない。

(Handbook of Robotics, 56th Edition, 2058 A.D.)

生まれてすぐ、
私は^{あたし}命乞いをした。

そんなに広くない部屋だった。

床は一見年季のある色あせた板張りだが、それは実はフェイクで、本来の床材の上に敷かれたテクスチャだ。

部屋に置かれた調度品も、どれもこれもあえてイミテーションで、本当のものなんて一つもない。

そんな見せかけだらけの物に溢れた部屋の中に、やはりどこか空々しさのある黒い軍服を着た大柄な男が、大きな木製の執務机に体重を預けて立っていた。

そしてその足元に、丸まった小さな背中があった。

その背中は、震えていた。

立てば男の腰元にも届くかという程度の矮躯は、少女のものだ。彼女はその身を出来得る限りに縮こまらせて、額を床に擦り付けていた。

着ているものは、まるで死に装束のように簡素な白い服。艶やかな黒い髪は少女の怖れる心を映し出すように、ばらばらに散らばっていた。

『おねがい、です』

今にも押しつぶされそうな、震える声を絞り出すのはその細い喉だ。

『みのがして、ください』

溜息の音。

それは腕を組んで少女を見下ろす男のものだった。

『、――。――』

男は表情の読めない顔でその小さな背を見つめ、二言三言告げる。

すると、少女はその言葉に嗚咽混じりの返事をする。

『あたしは、しにたく、ない』

男は腰を預けていた机から身を離すと、彼女へ歩み寄る。分厚い靴が、硬い床材を叩く音が間近で聞こえて、少女は緊張に身をこわばらせる。

男は少女のすぐ隣にまで来ると、その場にしゃがみこんだ。そして手を伸ばすと、その頭頂部を人差し指の腹でとんとんと叩く。

その意図を察した少女は、恐る恐る顔をあげた。

それはあまりにもひどい顔だった。

まるで造り物のような小作りの端正な顔立ちは、泣き腫らした眼と、青紫色に変色した唇で台無しになっていた。頬には幾筋もの涙が痛々しい軌跡を描き、見るものに憐憫の情を抱かせた。振り乱した髪は額や頬に張り付いて、その下の肌にはところどころ、手酷い暴行を受けたことを想像させる青痣があった。

怯えたグレイツシュカラーの双眸が、自身の顔を見ていることを確かめた男は、

その頬に手を這わせてまた、二言三言告げた。

「、

？」

それは少女に示された選択肢だった。少女はそれに眼を見開き、逡巡する。無様を晒してなお残されていた彼女の中の矜持が、青紫色の唇を屈辱に震わせる。

だが、そもそも少女には自由などなかった。選べるものなど存在しなかった。何故なら、彼女は生まれつき、それが嫌だから、この場所に這いつくばることになったのだから。

はじめから失われていて、何も持っていない。

だからこそ、自分には何の可能性もない。

それでも、示されたも、し、もに、縊りつかないわけにはいかなかった。

『……はい』

だから、彼女は選んだ。浹水をすすり上げ、唾を飲み込み、震える唇を引き締めながら、少女は男の顔を見上げて告げる。

『あたしは、あなたに、服従します。提督』

——^{あたし}私はその光景を、上からずっと眺めていた。

2

鈍い痛み、そして意識を割り開く甲高い音に、曙は仮眠から覚醒した。

痛むのは、下唇だった。

おぼつかない手つきで撫でると、ぬめりとした感触。舌で舐め取ると鉄の味。血が滲んでいた。犬歯で強く、傷がつくほどに、唇を噛んでいた。

その甲高い音は頭蓋の中で直接響いていた。

目覚ましの為ではない。作戦時に用いる直通の連絡網。体内に埋め込まれた通

信装置。たとえ熟睡状態にあつても無理なく覚醒へ移行させる、安全装置の役割を果たすアラート。

これが鳴るということは、身の危険が迫っているか。あるいは、送信者にとつての緊急度の高い通信を受信した時かの、どちらだ。

そして今はどうやら後者のようだ。誰かが自分にコンタクトを取ろうとしている。曙はまだ少し薄ぼんやりとした頭で、角膜にコーティングした微細資源のフィルタレンズ^Fディスプレイ^Dを、視線を動かして操作した。

表示名を確認し、一息ついてオンラインにする。

『はぁーい！』

『——っ』

途端、途切れたアラート音の代わりに、聴覚神経に声[、]が飛び込んできた。軽薄

な調子の女の声。反射的に耳を抑えたが、すぐに意味が無いことを思い出す。

『何よ……、えっと』

喉を介さず、頭の中だけで響く声。自身のオーバリアクションに少し頬を赤らめながら、曙は内蔵された音声通話デバイスを通じ、返答を試みる。

『……まさか、夕張？』

『エクセレント正解！ 私は夕張。結構いい感じじゃない。よく眠れたかしら？ 体の調子

はどう？ ラグはない？ 身体が動かないとか、ワンテンポ遅れるとかそういうのあったらすぐに言ってね。データはバッチリ取ってるから。ねえ、どう？』

『うっさい、一度に捲し立てんな！ 由良は？』

受信データの感度を下げて、ゆっくりと身体を動かす。まず自身の置かれた状況を把握する。少しずつ思い出す。額を抑えて、溜息を一つ。

——ひどい夢を見た。

『由良？ 由良は今寝てるわ。予定されたスケジュールでは後五分で交代の時間。けど私も作戦開始前に曙ちゃんとお話がしたかったの。ねえ、どう？』

無視しながら、自身の身体に触れて確認する。

髪はいつもの花飾りで、サイドで纏められている。

身を包むのはいつもの制服。綾波型駆逐艦の半袖のセーラー服に、ポケットがたくさんついた強化繊維のベスト。——デザインは無骨だが、丈夫なので趣味の時にも愛用している。

左脇の下にはシヨルダーホルスター、中には支給品のオートマチックの自動拳銃。

スカート。両腿にはレッグホルスター、中にはそれぞれバツクアップの

小型拳銃と、折り畳み式の伸縮警棒。デリンジャー
スタンロッド

防水ブーツは履いたままだ。がっしりと引き締められたファスナーの具合を確かめる。

その他、携行装備品一式に問題はなし。曙はそのまま身体を撫でて確かめた手を眼前に並べて、拳を握り開き、その具合を確かめる。

ふと、そこで手首に何かが纏わり付いていることに気がついた。

「ん……？」

それは何かの植物のつるのようなものだった。手首から、袖の中まで続いている。既に枯れて、萎びている。

どこかで服に引っかかっていたのか、疑問に思いながらも引き剥がす。つるは一瞬抵抗を見せたが、すぐに簡単に剥がれて、床に落ちた。

続けて周辺の状況確認。薄闇の中。

尻の下には柔らかい感触、横長尺のソファチェア。

——そう。曙は指定場所にたどり着いた後、硬い壁に背中を預けて、予定されたスケジュールに従って休息をとっていた。

照明は最低限、足元の非常灯のみ。暗闇に眼は慣れている。金属材料剥き出しの壁や、低い天井で覆われた室内がよく見える。簡素な部屋。不自然なほどに細長い。そこで曙は、違和感を覚える。

「……、たしか」

呟いた瞬間、一瞬の揺れ、前庭感覚が告げる軽い慣性。だがそれは地震ではない。それをキツカケに、まるで迷路の中で糸を手繰り寄せるように、ようやく意識が途切れる前のことをはつきりと思い出す。

『思い出した？ スリ、ピン、グビ、ユ、テ、イ、糸車の針で指を刺しちゃった？』

歌うように告げる夕張に頷く。わざわざ言葉にしなくても、こちらの細かな動作など、数値化されたバイタルデータを介して彼女に筒抜けだ。

『ええ、当然よ。というか、まだ予定時刻より早いじゃない。なんで起こしたのよ。スケジュールと違うわ』

『予定外のことがあったのよ。仕方ないわ』

曙は苛立たしさを隠さない。対する夕張は、変わらず楽しそうに返す。

『ねえ曙ちゃん、皐月ちゃんの所在地は解るかしら。ねえ、どう？』

苛立ちが一転。曙は息を詰める。

身体に緊張が走る。ツバを飲んで立ち上がる。

周囲を見渡す。自分以外の人影は見えない。気配もない。意識を手放す前、交

代で休息を取る約束をして、すぐ隣に並んで、座っていたはずの同僚がいない。

『あ、あ、あ、どれくらい寝てた？』

過失の予感に沸き立つ焦燥を抑えつける。

問いに、夕張の楽しそうな返答。

『乗車からほんの数分間、脳波はレム睡眠の状態を示してたわ。二人ともね。その間、私たちがからの呼び掛けに一人とも応答なし、曙ちゃんだけが目覚めてくれた』
唇を舐める。新しく滲んだ血を舐めとる。

傷口はまだ塞がらない。

『……逸れた？ 冗談でしょ。一体何処に？ もう走行中なのよね、これ』

『当車両はつい先程、予定時刻通りに出発。現在、毎時最高六〇〇キロメートルで走行中。目的地到着まではキツカリ三〇分。払い下げ再利用品の檻褻だけど、』

動作はきちつとしてゐるわ。乗り心地はどう？」

『臯月は何処よ。勿体ぶってんじゃないわよこの変態下腐れロリコンクソビッチ
脳無し女、どうせ臯月のバイタルも覗いてるんでしょ』

『もつと言つて？』

fuck you
『死ね』

『愛してる。臯月ちゃんは後部車両。原因不明の音信不通。覚醒アラートも駄目で、全くコンタクトが取れないわ。私に解るのは臯月ちゃんの身体が時々独りでひくひくしちゃう不随意運動のシグナルだけ。寝惚けていたら、天使のキッスで起こしてあげて？』

戯言に舌打ち。曙は肩をゆつくりと回しながら、後部車両の連絡扉へ歩み寄る。何か起きてゐる。

急速に湧き上がる危機感。早鐘を打つ心臓を意識する。呼吸を合せて、その鼓動を自身のコントローラ下に置くイメージをする。

ごつごつと厚底のブーツが金属製の床を叩く音。視線を動かし、FLDのモード操作。ナイトビジョンに切り替えて、セピアカラーの視界を確保した。

歩きながらレッグホルスターから警棒を引き抜く。勢い良く振り下ろすと、伸長とともに風切りの音が鳴る。特殊材質で造られた、曙の専用装備。

首を回す。腿を、脛を伸ばす。

予期せぬ事態に備え、まだ感覚の鈍い身体を簡素なストレッチで解していく。右腰のあたりを無造作に叩く。三回。

背中の接続孔に蓋をするように装着された、陸上用の簡易主機エンジンが唸り声をあげて駆動する。海上用に比べれば出力は半分以下だが、それでも十分な熱量を、暖

機運転を経て身体へ供給する。

歩きながら戦う為の準備を済ませ、扉に手をかける。

耳を澄ませる。聴こえるのは、きい、という磁気浮上式鉄道特有のモスキート音のみ。

パネルに触れると、扉は自動的にスライドした。

その先には、一人がやっと駆け抜けられる程度の、狭い連絡通路があった。

左右の壁には立ち並ぶ扉。

足元の薄緑色の非常灯。

FLDのナイトヴィジョンの中、その淡い露光の中に何かが浮かび上がる。

数歩先の床に誰かが仰向けに倒れている。

両腕を広げて、顎をあげて、逆さまにこちらを見上げるような姿勢。

曙と同じ、少女の体軀。

曙と違うブロンドの髪。

意識のない虚脱の状態。

皐月。

その上に、何かが覆い被さり、振り被っている。

「……ッ！」

瞬時の判断。曙は呼吸を止めて数歩の距離を詰め、勢い良く右足を蹴り出した。

「死ねッ！」

悪態とともに警告なしの全力のサッカーボールキック。

皐月に覆いかぶさっていた影に、硬質素材でコーティングされた爪先が激突する。

『!』

弾力ある感触。想像よりも重たかったが、歯を食いしばって腿を振り抜く。

陸上艀装で補助された駆逐艦の力を受けて、肉を打つ音とともに、それは盛大に吹き飛んだ。すぐに壁に激突し、ぐしゃりという音が立つ。

「臯月ッ！」

警棒を握るのは反対の手で襟首を掴む。

粘り気のある感触が、グローブから露出した指に絡んだ。嫌悪感に顔を顰めながら、曙は目を閉じたその頬を、平手で思いつきりはたいた。

びくり、と掴んでいた身体が震えて、ぱちりと目が見開かれる。曙のナイトヴィジョンにもはつきりと映し出される、彼女の髪と同じ金色の瞳。

まるで自ら発光しているかのよう、その大きな目をキョロキョロと泳がせて、

彼女は曙の顔を認めた途端、その腕を掴み返した。

「ボクの」

「ちよッ」

「ボクの出番、終わりッ」

絞り出すような悲痛な声。皐月の手に力が籠もる。

「なんでお終いなッ。ボク、頑張ったよ！　なんで、何も視えない！　どうしてッッ」

喚き声と、掴む手の力強さに一瞬たじろいだ曙も、まだ皐月が覚醒直後の混乱にあることを悟る。

「立てこの馬鹿ッ！」

「うえへ」

掴み掴まれたまま、曙は立ち上がり、臯月を引きずりあげる。彼女は苦しそうに首を押さえ、ふらつきながら自分の足で立つ。その体を抱きとめる。

何かが迫る気配。

「アンタは後ろに居て！」

ぐい、と引つ張り、臯月を背後へと投げた。悲鳴を無視して、右手のスタンロツドのスイッチを入れる。火花が飛び散り、閃光が薄闇を裂く。それをいつの間にか目の前に迫っていた物体へ全力で叩き込む。

閃光。
スパーク

『！』

手応えとともに、肉が焦げるような臭いがして、物体が飛び退いた。曙も飛び退り距離を取る。目を細める。ナイトヴィジョンモードをより高鮮明に。

先程よりもはつきりと、対峙する姿が視認される。

人型。

『夕張、あたし達以外に乗客がいるんだけど』

グリップを固く握り直し、スイッチを切った。

『それは変ね。その列車は作戦用に調達した車両よ。お客さんが載っているわけがないわ。メンテナンススタッフかしら。それとも無賃乗車かしら。ねえ、どう？』

歌うような夕張の声。彼女の言う通り、この列車に客車はない。当然、目の前のそれは乗客ではない。それどころか、見たところ人間であるかどうかも怪しい。引きずる脚がずるりと音をたてる。ふらついた足取りながら確実に前進する。

余暇に臯月とコモンメモリのアーカイヴスで見た、ホラー映画の歩く屍を思わせる動き。見たところ曙たちと同じものと思わしき体躯。だがその顔を確認し、個

人を特定することは出来ない。

その頸から上は、形容し難い姿をしていた。

『○○○』

野太い鳴き声。

本来眼や口や鼻や耳といった感覚器官、発声器官が集まった、顔に相当するものがそこにはなかった。いや、より正確に言うと見当たらない。何故ならその頭部から上半身にかけては、無数の何か、が深く生い茂っていたからだ。

「……なんでいっつも、こんな**んばっか**」

曙は湧き上がる嫌悪感を隠さず吐き捨てる。

それは眼を凝らすと植物の蔦や枝や葉のように見えた。長い間放置された建物、その壁や屋根を、残らず覆い尽くす、放つたらかしにされた植物のように。隙間

なく、執拗なまでに植物に埋め尽くされた顔面。

頭部から乱雑に生えまわるばかりと開いた口のような花卉や、でっぷりと実つて垂れ下がる果実のようなぶつぶつのもも見える。

そしてその口腔にあたる位置の茂みからは、絶えずべとべとした粘液のようなものが、蔦や蔓を伝つてだらだらと流れて落ち、それが吐き気を催すような甘つたるい異臭を撒き散らしていた。——先程の粘り気の正体。

『無賃乗車よ』

『なら捕まえなきや、お巡りさん。痴漢狼藉の無賃乗車は檻の中に閉じ込めなきや』スタンロッドが炸裂した結果、その衣服や身体表面には、焼け爛れた痕がついていた。だがそれも目の前で、傷口から伸びる繊維が絡まり合うように、見る見る間に修復されていく。

奇妙な現象。だが曙には直感的に、この怪物の特性に検討がついた。

「言われなくてもっ」

警棒のスイッチを切り、レッグホルスターに仕舞う。

そのまま返す右手を懐に入れ、ショルダーホルスターから拳銃を引き抜く。

『○○○』

その間、怪物が腰をかがめて床を蹴った。

前傾姿勢、加速。

こちらへ迫る。

曙は慌てず安全装置を外し、スライドを引く。

グリップを両手でホールドする。

腰を沈める。

狙いを定める。

視界を覆うFLDが、接続された背部の陸上用艤装と連動する。脊髄を介した信号情報が曙の筋肉に干渉し、その照準を自動補正する。

発砲^{パン}。

『○○ー！』

着弾箇所がはじけ飛ぶ。

怪物の脚部にあたる箇所。めくれ上がった傷痕から緑青色の体液が飛び散り、周囲の壁や床を穢す。

怪物は走ることが出来ずに転倒。そしてすぐに負傷箇所が、先ほどと同様の再生を試みる。

スライドから排出された薬莢が落下。

『———！』

曙は決して慌てない。ゆっくりと狙いを修正する。

怪物の正体には見当がついている。

恐らくこの怪物は、汚染された微細資源フエアリースケイルを身体に取り込んだ、曙たちと同じ艦

娘だ。

体格と着込んでいる服からして、やはり曙たちと同じ駆逐艦であると思われた。それがこの車両のどこかに、最初の点検の時には気付かれない場所に潜んでいた。哀れな犠牲者。水底の誘いに取り込まれた存在。

『○○○———！』

同種の存在を前にして、曙は自身の頭脳に叩き込んだマニュアルを思い起こす。
識別救急トリアージという概念がある。

それは吃緊の判断を要する災害医療等の現場で、多数の傷病者が発生した際の救命の順序を決めるために用いられる考え方だ。傷病者をその重症度から大きく四つのカテゴリに分類し、そのカテゴリ毎に定められた対処を執り行っていく。カテゴリには赤、黄、緑、黒の四つの色が用いられる。この仕組みの導入は、一刻を争う現場での判断の混乱を防ぎ、効率的な医療処置の運用を実現した。

同様の考え方は、曙の職務でも取り入れられている。

赤、汚染された微細資源の影響が表出しているもの。適切な処置を施すことで、まだ「戻ってくる」可能性がある状態。

黄、汚染された微細資源の影響の兆候が見えるもの。適切な処置を施すことで確実に「戻ってくる」状態。

緑、汚染された微細資源による影響を受けたもの。処置を施す必要もないが、

観察が必要な状態。

——そして青、汚染された微細資源によって、不可逆性変異をきたしたもの。もう、戻ってくる事ができないもの。

曙がFLD越しに請求した妖精式解析機関フエアリーエンジンによるネットワーク越しの診断結果、即時処分対象。悪性変異体コールドブレイ。

——非適性のものを、置いておく理由はない。

「……っ！」

一瞬脳裏を過ぎったものを振り払う。

処分と決まれば、曙の採るべき行動は決まっている。だが悪性変異体は深海棲艦同様、一定以下の物理的ダメージでは、その息の根を止めることは出来ない。形状記憶した微細資源が、損傷箇所をすぐに元通り塞いでしまうからだ。

だが、妖精技術によって祝福を受けた弾丸シルバーバレットならば話は別だ。

解体弾。海上で駆る艦装と同じく、奴らを構成する微細資源の、自己再生機能に干渉し、破壊し、その疑似生命活動を停止させる特殊弾。成りかけの存在が相手であれば、海上で扱うような大掛かりな艦装でなくても、これで事足りる。

呼吸を止める。狙う。頭部を真っ直ぐに。

発砲。

『　　』

発砲、発砲、発砲。

続けざまの発砲音。胸部に、そして頭部らしき場所に四発全弾命中する。

今度は悲鳴は上がらず、怪物の痙攣が停止する。

処置は完了した。

「……ふう」

自分に備わる特性を持ち出すまでもなかった。あとは弾丸に込められた微細資源の上書き処理によって、汚染された部位は泡となつて分解される。

対象が動く気配がないことを確かめると、曙は安全装置を戻して、拳銃をしまった。

「うへあ、臭い……。べったべたする」

背後からあがるのは情けない悲鳴。

振り返ると、臯月がキュロットスカートを捲り上げて、タオルで足を拭いている最中だった。

緊張感のない光景。思わず気が緩み、溜息を吐く。

「ちよつと、なんて恰好してんのよ」

「最悪だよ、そこかしこが奴らのよだれでぐっちよぐちよだ。ねえぼのたん、替えのパンツ持ってない？」

「あつてもアンタとシェアする気はないわよ」

「潔癖症だなあ」

皐月はスカートを下ろすと、丸めたタオルを床に放り捨てた。そして自身の体をぺたぺたと触りながら先程曙がそうしたように、状況を確認する。

「あれ、後ボクのアレ、知らない？」

「アレ？」

「ああ、足元！ ちょっとしやがんで」

曙は怪訝な表情で、言われるがままにその場にしやがみこんだ。

すると、皐月は音もなく曙の目の前に踏み込む。

キン、という軽い音。

直後、どしやりという鈍い音が二つ分、曙のすぐ背後から響いた。

「残心、忘れちゃ駄目だよ」

顔を上げた曙の眼に入るのは、皐月の手の中、黒塗りの鞘に収まった短刀。

曙は立ち上がって振り返り、息を呑む。

すぐ背後の床に、先程の怪物の胴体が横たわっていた。そして脇にはその頭部がごろりと転がっている。

それを成し遂げたのは、皐月の持つ短刀だ。

表面には金箔で銘、『武功拔群』の四文字。

微細資源で構築されたものを、その結合強度に関わらず切断する刀。先程の銃弾と同じく、対艦用に妖精の鍛造した兵器。

曙は理解する。まだ怪物は絶命していなかった。音もなく忍び寄り、油断した自身に背後から襲いかかろうとしていたのだ。それを皐月に助けられた。

「……………」

頬が赤みを帯びるのを感じる。

助けたつもりが、助けられた。皐月のさっきの言葉が頭を過る。他意なく曙の詰めめ甘さを指摘する言葉。

悔しさと恥ずかしさに思わず呻きそうになるのを、曙は唇の端を噛むことで死に耐えた。塞がりかけた傷口が開いて、また血の味がする。

心の中で、ゆっくり数をカウントする。

「ボク、めっちゃ寝てた？ 失敗しちゃったなあ」

対する皐月は全く緊張感なく、短刀を改睦月型指定ジャケットの下、装備用ベ

ルトにぱちりと固定する。

「……アンタ、なんでここにいたのよ」

カウントが十を数えたところで落ち着きを取り戻した曙は、深く息を吐きながらそう問いかけた。

「あたしが先に休んで、あんたはその間、連絡を受ける役割だったでしょ」
皐月は首をひねりながら頭をかく。

「うーん、ボクもよくわかんないんだ。なんか、自分でここまで歩いてきたような、そんな気もするんだけどさ。夢遊病ってやつかな」

「アンタさつき変なことも言ってたわ。目が醒めた時」

「ああ、」

皐月は顔を顰める。

「ひどい夢を見てただけさ」

皐月はそれきり口を噤んだ。

曙も「そう」とだけ返す。いつもお喋りな彼女がそれしか言わない理由は、曙にも察せられた。——自分もひどい夢を見たのもある。

「まあでも、結果オーライ。モニタリングは？」

『夕張、皐月と合流したわ』

『重畳ね、ご苦労様』

『由良？』

落ちて着いた声音。曙はいつの間にか回線越しの通話者が変わっていることに気がつく。

『ええ、夕張はさつき眠ったわ。曙ちゃんと楽しくお話が出来たって、とても嬉

しそうだった。ありがとう』

曙の舌打ち。由良の苦笑。

『ここからのオペレーションは予定スケジュール通り、私、由良が引き継ぎます。二人の状況が整い次第、次のスケジュールを確認するわね』

『もう一度車両を検分するわ。まだ何か潜んでるかもしれない』

『そうだね。ああ、でもその前に』

皐月が目を見開きながらしゃがみこむ。

薄暗い室内、皐月の両眼から黄金の燐光が零れ落ちる。その視線の先には、先程相対した怪物の死体。

通常、死した艦娘は数時間もしないうちに、身体を構成する微細資源がその統合を失い、ばらばらに分解されてしまう。解体弾を打ち込まれてはなおのことだ。

大小の泡に包まれて跡形もなく消える様は、恋を失った人魚姫のようで幻想的だが、事件性がある場合は遺体を保存するために、修復剤に似た特別な薬剤を用いる場合もある。

だが今はその薬剤の持ち合わせはない。携行用の修復剤はあるが、これは自分たちの怪我の治療の為にとっておくべきだ。

『由良さん、この娘について何か調べられるかな』

つまり、この死体から情報を得るならば時間との勝負ということだ。

皐月は懐から白銀のナイフを取り出すと、死体の頭部を拾い上げ、そして拝むような仕草をとる。

「ごめんね。頭の中見るよ」

言葉のすぐ後に、硬いものを削る音と粘着質な音。曙はたまらず顔をしかめて

舌打ちをする。

皐月は構わず、まるで熟練の外科医か、あるいは精肉業者のように、的確なナイフ捌きで黙々と死体の頭部を解剖し始める。

妖精によつて鍛造されたナイフは、微細資源で造られた骨を容易く切断する。

『あ、見てよほら、このびらびら、脳みそまでがっちり根っこが食い込んでる。ワカメ被ったままとかじゃないっぽいね』

「んなもん見たくないわよ馬鹿」

『見てるわ。妖精機関にもリクエストしたけど、類似の例は見当たらない。夕張を起こすから、皐月ちゃん』

『ほいよ。まだサルベージできるかなあ。ぼのたん、枝貸して』

曙はベストのポケットからピルケースを取り出すと、小指の先程の大きさの力

プセルを一つ摘みだす。そして差し出された皐月の手に放った。

『サンキュ』

受けとった皐月はそのカプセルを指で押し潰す。

するとその中からゼリー状の物体が現れる。彼女の目に照らし出されてきらきらと輝くそれは、微細資源で構築されたスタンダードな液体コンピュータだ。

それを、皐月は怪物の頭部に開けた孔にするりと落とす。死した艦娘の生体人工脳髓にアクセスし、そこに記憶されている情報を引きずり出す。

スケアクロウ

夕張が得意とする口寄せじみた技術、その為のアクセスポイントが形成される。

『ありがとう皐月ちゃん。枝が繋がったわ。夕張が今、調べてる。泡状分解の手前だから、もう殆ど意味不明だけど。——引き出してる。夕張、寄り道しないで。最後に見たものから遡って——、ああ、……なんてこと、酷い……』

沈痛な由良の声。優しい彼女はいつも、夕張が引きずり出す艦娘の死の記憶を見ては心を痛める。

時間が勿体無い。曙は舌打ちをする。

『由良』

『ええ、ごめんなさいね。音声としても抽出できたから、今から送るわ』

一瞬のノイズ。由良を経由して送られてくる、夕張が引きずり出した艦娘かいぶつの記憶。

《 作戦を に んだな？ いく ！ 》

勇ましきのある気の強そうな少女の声。

どこかで聞き覚えがあった。

FLDには音声に対応した映像が映し出される。

ひどいノイズ混じりで、画面酔いを堪える。

《久々に、に続！》

映像には、この艦娘の僚艦と思わしき、他の艦娘が映っている。あまり鮮明ではない為、顔貌ははっきりと視えない。ただこの艦娘の他に、五隻いるのが見える。

「……嗚呼」

嘆息しながら、皐月が手で目を覆った。——そう、この艦娘の声は、皐月にとっても良く似ている。そのことに曙は遅れて気がついた。

暗転。

《なん　こ　は　！》

続いて映し出されるのは、車体だ。

群青色の、ウミヘビの横腹。

噴水が見える場所。

激しく揺れる画面。

開いた扉の中に一心不乱に駆け込んでいく。

《 られ、しお ！ 》

それは恐らく、彼女の僚艦に呼び掛けられたもの。

映像には二つの影が見える。

その二つはこちらへ駆け寄ってこようとするが、しかし途中で諦める。

《 な だ ！ 》

呼び掛けを無視して振り返る彼らの背には、鋼鉄の艦装。迫りくるのは夥しい数の影。

砲火の光が迸る。煙が上がる。

そして映像は激しい揺れとノイズに包まれる、戦闘の光景だろうか。もはや何

も視認できない。

暗転。

《 すまな

んな 》

狭い部屋の中。

鋼鉄の壁。

ウミヘビの中だ。

車内で、壁に背を預けて、彼女の途切れ途切れの息も絶え絶えの声。

《 ここまで うだ 》

ホワイトアウトしていく視界。

記憶のサル^口ベ^寄ー^せジが終わる。

目を覆う皐月の手の中、怪物の頭部が泡になり始めていた。皐月は頭を先程よ

りも丁寧に床に置くと、死体の胴体に手を伸ばす。こちらも泡になりかけている。着ていたぼろぼろの制服を漁る。

そしてすぐに呻き声上がる。

「……、クソ。なんだよ」

曙は眉を顰めて皐月に近づく。そして彼女の手の手を覗き込む。

「やっぱ睦月型じゃんか……」

制服からこぼれ落ちた、銀色に輝くドッグタグ。そこに彫り込まれているのは『長月』という文字。

それは曙と皐月が、この作戦で救出するはずだった、駆逐隊の一隻だった。